

## 所長挨拶

## 遠方からの助け

みやしろ やすたけ  
宮代 康文

(湘南藤沢メディアセンター所長)



今秋、湘南藤沢メディアセンター所長の任を拝命した。ここ数年のコロナ禍において、各キャンパスのメディアセンターが未曾有の課題を乗り越えなければならなかったであろうことは想像に難くない。湘南藤沢メディアセンターにも、前所長の廣瀬陽子教授の舵取りのもと、キャンパス全体の知的活動の継続を支えていただいた。今後のいっそうの発展のために、新所長として微力ながらも心を尽くしたい。

メディアセンターの任務は多岐に及ぶ。単なる一利用者に過ぎなかった私が、そのことに改めて気付いたのは、事務職員の方々によるご教示のおかげである。研究活動の支援は要の任務の一つである。この点について、慶應義塾のメディアセンターに大いに助けられた時のことをここに記したい。

海外の博士課程に在籍していた頃、とあるフランスの哲学者について調べていたことがある。その哲学者は、カントの「永遠平和のために」を仏訳し、ヨーロッパの平和構築に関心を寄せていた。国際平和と自由連盟の機関紙「ヨーロッパ合州国」にも度々寄稿していた。私が探していたのは、その1870年第3号に掲載された論説である。今から思えば私の調べ方が悪かったにちがいないが、とにかく当時は、何でも揃っているはずのフランス国立図書館においてさえ、その論説を手に入れられなかった。さて、資料不足のまま論文を書くか、入手できるまで探し続けるか。そう迷いつつ、念のためにKOSMOSを検索したが、フランスにないものが日本にあるわけがないと半ば諦めていた。ところが、あったのである。しかも、なぜか当の号だけが所蔵されていた。大急ぎで複写を手に入れ、ひと息に読み終えたことは言うまでもない。「ヨーロッパ合州国」はかなりの号数が発刊された機関紙である。なぜ1870年第3号だけが慶應義塾にあるのか。誰が入手し、どのような経緯で蔵書に加えたのか。これらの謎は、いまだに私の推理小説的興味をかき立てる。帰国したらぜひ

実物を手に取りたいと願っていたが、その号は現在、遠く山中2号棟に配置されており、まだ手元に取寄せる機会を得ていない（請求記号：TB@2@265）。

この経験を思い出す度に、大学での資料の所蔵がいかに関の進捗や精度を左右しうるものかと考えてしまう。私が従事している人文学系の研究において、過去の資料が時間の経過によって価値を失うことはない。歴史的な調査の材料になることはもちろんであるが、そればかりでなく、現在に対する新たな着眼点を与えることもある。もっとも、所蔵には物理的な限度があり、置き場所がなくなれば、取捨選択せざるをえない。デジタル化が問題を解決するかといえば、どのみちすべての資料を収めることは無理な相談なのだから（そもそも「すべて」とは何を意味するのか）、何を選び何を残すかという問題は残る。幸いなことに、慶應義塾には各キャンパスにメディアセンターがある。それぞれの特色や需要に沿いつつ、全体としては相補う関係を築くことができるであろう。

湘南藤沢メディアセンターはどうか。その様子は、私が長らく抱いてきた図書館像とはかけ離れている。が、それはむしろ快い乖離である。開放感に満ちた明るい館内は、階ごとに、またスペースごとに活気と静寂が交替する。ファブスペースの先駆的な機器群と時代を重ねた岩波文庫とが共存する。書架では、和書の隣に、同じ主題を扱う洋書が並んでいたりする。目当てのもの以外の本にふと気付くのは開架式書庫の醍醐味であるが、湘南藤沢メディアセンターでは、言語の垣根を越えた偶然の発見にも恵まれる。配架の創意の賜物である。利用者も多様であり、それぞれの目的を持つ教職員・学生・塾員・SFC研究所員・藤沢市民などが行き交う。このきわめて湘南藤沢キャンパスらしい場を、ますます活力に溢れたものにするよう努めたい。